

沖縄における伝統的集住空間構成に関する研究

朴 賛 弼

A Study on The Space Composition of Traditional Houses and Village of Okinawa Island

PARK Chanpil

This paper is the investigation for village and traditional houses in Okinawa Island. The purpose of this study is to find out the some characteristics concerning space composition. Architecture conforms to the natural and social environments, and to historical traditions. The idea behind an architecture is personal, and also objective. In history, a form of architecture appears, grows little by little and continuously changes as the centuries go by.

Okinawa Island has the most unique culture in the Japan Peninsula. The tradition private house adjusted to a climate in the land. That is, the climate and a natural condition such as geographical features and was built. Those that the resident is in the climate, too who live are done. The Okinawa tradition dwelling construction considered mainly a site planning, a plane, elevation, a section plan, and an architectural form by natural environment. Moreover, the tradition dwelling was compared with the present age dwelling and it considered it in nature and the culture.

1. はじめに

本稿は、沖縄における伝統的集落、住居の空間構成の在り方を、自然人文環境の視点から考察するものである。沖縄諸島は日本の本土とは全く異なった文化を持つ。島における自然条件の厳しさは血縁と地縁の結合を緊密にし、共同運命体という枠で生活し続けてきたのである。このような暮らし環境が沖縄の独特な集住文化を形成した。固有の空間性、形態要素などが歴

然とするのは民家建築の特性である。また、その特性を決定づける要因は、気候的要素といえる。日本でも特異な自然環境におかれている地域であるため、古来、沖縄の人々は人と自然、人と人との長い関わりの中から独特の風土が形成され、沖縄地域の個性的な感性と建築様式が生まれてきた。

研究の対象地域は、沖縄の本島、石垣島、西表島、竹富島を中心とする。研究進行過程は島の郷土的伝統民家ができるまでの、島の自然的背景、文化的背景、社会的背景、歴史的背景などの環境要因を考察したうえで、島の伝統建築の独自性を論じる。島の集落においては風水思想からみた形而上学的な理論と方法に基付き、形而下学的な具象としての建築的空間の構成を分析するという新たな着想と方法で行った。住居に対しては沖縄における伝統民家を現地調査や文献調査による、配置、平面、立面からみた立体的な角度で分析し、民家の特徴を明らかにする。そのうえで、結論として自然人文環境が民家に与えた関連性を明確にすることが本研究の目的である。

さらに、次年度の研究のためには沖縄の集住空間構成を明らかにし、2009年度に発表した韓国済州島の集住空間構成の研究¹⁾と比較することによって両島の集住の空間構成の関わりを探ろうとするものである。

2. 自然人文環境

2-1 気候

琉球の気候は、海洋性亜熱帯に属し、四季の感じはうすい。各島はいずれも小さい島であり、高山（本島与那覇岳:449m、石垣島於茂登岳525m 最高峰）と大川はほとんどないので陸地による気象的变化は激しくない。雨は多く、年間降水量2,000mmを越すにもかかわらず比較的平坦な地形と、保水性の低い島の条件下で生活水の確保が困難である。そのため村落の人々の生活には天水や湧水、井戸からの取水が重要であった。気温は夏の場合、蒸し暑い。高温多湿によって沖縄の木造建築は腐朽が早く、また種々の虫害も多い。沖縄の気候の中で特徴的なものは台風である。年間を通して風速値は高いが、夏期、冬期の主風向はそれぞれ南東、北西であり、地域によって多少の差が見られる。台風期は七月から十一月初旬までで、約4カ月間は台風のシーズンである。最大風速40~75mの台風が時々襲い民家、農作物などに大被害を与える。この台風の対策として沖縄の伝統的民家の屋根は工夫されている。たとえば、赤瓦を白い漆喰でとめたり、家の囲いには福木などを植えたり、石垣を築くことなど台風の対策をとっている。このような自然環境に対する住居の要素が沖縄の独特の景観となる。

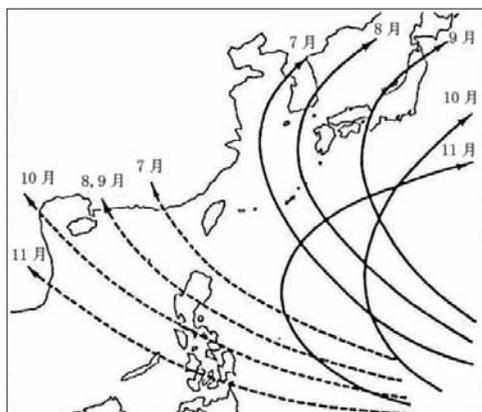


図1 東アジアにおける月別台風進路図

表1 沖縄中心部の年平均気候

気候	那覇	石垣島	平均
平均気温 (°C)	22.3	24.04	23.17
相対湿度 (%)	77	77.5	77.25
風速 (m/s)	5.5	7.1	6.3
降水量 (mm)	2,118	2,207	2,136

2-2 地理

日本の最南端に位置する県で、九州南端から台湾に至る1,300kmの海上に飛石状に連なる南西諸島中、北緯27度以南の沖縄諸島、宮古諸島、八重山諸島など大小60余の島々になっている。土壌は主として火山性及びサンゴ礁堆積物により形成されているが、サンゴ礁堆積物によるいわゆる琉球石灰岩層は50万年前以降の比較的新しい地殻変動により10~200mの範囲で隆起してできた地層である。これは日本では南西諸島以外には見られない沖縄地域特有のものである。この石灰岩層下部には多くの湧水がみられる。沖縄では河川に沿った集落の形成は少なく、このような琉球石灰岩段丘に沿って集中している。

沖縄本島は狭長な島で、長さ135km、幅のもっとも広い所で28km、もっとも狭い所は4kmである。北部が国頭地方で、300m~500mの国頭山地とよばれる老年期の山地でおおわれている。東の山地と西側に海岸段丘が発達し、段丘をおおう赤色の洪積土は酸性が強くパインの栽培に適している。川が少なく、基盤の第3期層とサンゴ礁の間から湧出する泉が飲料水となっている。

石垣島は八重山諸島の主島で、沖縄県の最高峰茂登岳(525m)があり、島の周囲、特に南の太平洋岸サンゴ礁が発達しているため、石垣港に入る船はすべて北の東シナ海側から出入りしている。地質構造は花崗岩・安山岩・古生層・新期石灰岩・礫層からなり、非常に複雑である。

八重山諸島中最大の西表島は第3期の砂岩でおおわれ、古見岳(470m)・テドウ山(442m)・御座岳(322m)などの山地が重畳し、面積の97%が亜熱帯原生林でおおわれている。これらの

ヤム、パタニ、マラッカ、スマトラ、カラパ（ジャカルタ）、ルソンなどに進出し、北方貿易は、九州、関西、朝鮮まで通交している。16世紀には、第二尚真王によって中央集権が行なわれ、各地方のアヂは首里に居住させられ、治安が確立されたので、武器も撤廃され平和国家になった。

1611年に与論島以北の奄美群島は琉球の支配から離れて島津藩の直轄地とし、沖縄島以南の沖縄群島と先島諸島（宮古、八重山群島）は形式的琉球国となった。奄美群島は島津藩の直轄地であるから島津藩へ貢献するが、沖縄島以南の島々では、琉球国と島津藩へ貢献しなければならなかった。特に先島諸島では、1637年から人頭税とされ、島民は苛酷であった。結末は奄美諸島の割譲と琉球は薩摩の属領となり、表面的には独立国を装い、对中国貿易を続けるが、その利益はすべて薩摩に搾取され、その蓄積が明治維新の薩摩の原動力となったといわれている。こうして、明治5年（1872年）に琉球藩となり、1879年3月に沖縄県となる。

2-4 風習

沖縄の共同体は、その構造面や機能面に濃厚に見られる。その特色は明治36年（1903年）まで、沖縄本島では班田収授の内容を持つ地割制度が行なわれた。同時に共同貢租という税制が行なわれた。村々には村内法という村の内規があって、法律と同じ効果を発揮していた。経済面、税制面、行政面において、極めて強固な共同精神の基礎構造をもっていたので、村人の生活はすべてこの共同体的精神の顕現であった。そのうえ共同労働も発達していた。「イーマールー」というのは、労力の交換共同作業であり、各戸順番に結いを行なうことであった。また「ブー」というのは道路工事、部落の共同施設の建設など、労働を村へ提供することであった。

共同施設である井は、沖縄では地層・地質の関係上、飲料水に適する井泉が少なく、昔は地下水の自然に湧きだす井泉は、村人の生活上きわめて貴重なものであったので、どの村でも村の古い井泉はなかば聖地扱いされ清浄に保たれて、そこを汚す行為は重罪視された。沖縄における自然条件の厳しさは血族の結合を緊密にし、共同運命体という枠で生活しなければならなかった。以上のような環境によって沖縄は独特の集住文化を形成してきた。

2-5 信仰

沖縄の信仰はまず水や火に対する崇拝と畏怖という原始的宗教感情である。沖縄人の神に対する考え方の中で、垂直神「オボッカグラ」という天下る神がある。これは聖地・神山に天下ると信じられている神である。垂直神に対しては水平神もあった。これは渡海神であり、これは遙か彼方の海を渡ってくる神で、「ニライカナイ」という。この「ニライカナイ」神を忠実に

伝承して盛大にやっているのは八重山群島である。

また、血族的結束に基づく祖先崇拜がある。祖神について、沖縄の人々は人間も死後33年を経過すれば祖神となると信じていた。そして、農作物をもたらす土地への崇拜もある。このような様々な信仰感情を組織化するには風水思想はきわめて有効な手段であり、当時王府の中心は政策として位置づけられた。

住居を構えるには、いろいろな条件があるが、信仰は其中で重要な役割を果たす。たとえば民家の配置、間取り、ヒンプン、シーサー（獅子）などは、住居と信仰との大切な関係である。このような、日常生活とともにある民間信仰と民家との関係を理解することが重要であると言えよう。

御嶽とは、琉球地方に確立された独自の自然観に基づく信仰形態を表す顕著な事例である。沖縄本土の南東に位置する知念村の山奥には琉球第一の聖地である斎場御嶽がある。琉球王国の第3代尚真王（在位1477～1526）が整備した国家的な宗教組織との関係が深い格式の高い御嶽で、中央集権的な王権を信仰面、精神面から支える国家的な祭祀の場として重要な役割を果たした。この斎場御嶽の聖地は山の中であり、図3のように巨大な岩山になっている。御嶽の中までには、全長約450mにも及ぶ石畳の参道があり、巨岩の上には、植物が力強く生い茂っており、植物だけでなく、昆虫や蜘蛛など生命力に満ち溢れている。写真で見ると2枚の巨岩が寄りかかって、鋭い三角形の形になっている（写真2）。その空間から暗い影と微かに照

らす光が神聖感を増す。この隙間が入口で、この隙間を通りぬけていくとその中には明るく狭い空間がある。中に入ると、自然との調和が荘厳な雰囲気になってくる。まるで、現世と神世

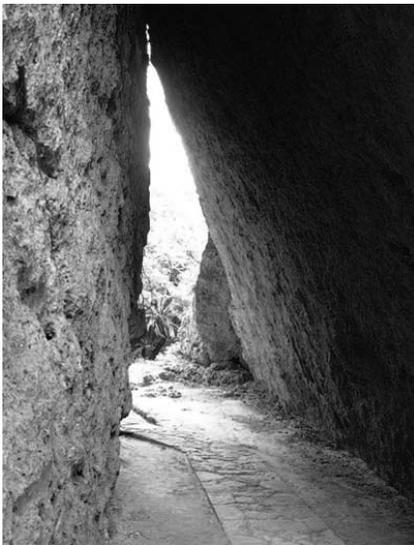


写真2 三角岩の斎場御嶽



写真3 御庭（ウナー）から久高島を眺める

との境界を感じる。この広場はいわゆる御庭（ウナー）という。また、正面に見える三角形の空間の突き当たりが三庫理（サンゲーイ）、岩壁に向かって岩を削っている場所がチョウノハナという拝所がある。チョウは切り立った岩山のこと、その先端部の意味である。いずれも首里城にある場所と同じ名前を持っている。その背面には、太平洋が見えて、この海には小さい島が目に入ってくる。その島の名は久高島である（写真3）。すなわち、この島が御嶽の発祥地である。まるで、現世と神世との境界の感さえある。三角岩の右側には、「貴婦人様休み所」と二本の鍾乳石が見える（写真4）。この鍾乳石から滴り落ちる水はその下に置かれた壺に受けられ、「聖なる樹木を潤す聖水」の意味がある。それぞれが国王の世子と最高女神官である「聞得大君（きこえおおきみ）」の吉兆を占うとともに、お正月の若水とりの儀式にも使われる霊水

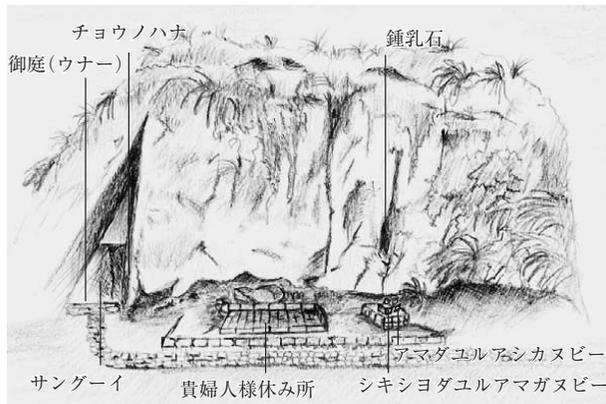


図3 巨大な岩山の斎場御嶽の全体図と名称



写真4 二本の鍾乳石からの聖水と壺



写真5 屋根の上のシーサー

であった。その壺はそれぞれ「シキヨダユルアマガヌビー」、「アマダユルアシカヌビー」と呼ばれている。

3. 沖縄集落の空間構成

3-1 風水思想と軸

風水では人間が住む所を陽宅、死者が住むところを陰宅といい、両者において気が最も集まる中心的な所を穴、穴の前面で生気を受けられる平らな場所を明堂という。穴や明堂は陰を背にし、陽を抱えて、後に山を背負い、前面に水を持つのが基本である。このような場所を背山面水、背山前水または背山臨水と言ひ、吉地である²⁾。図のように背山臨水の軸は集落の背後の山を主山とし、その主山から集落の前面に水があるところの方向とする。すなわち、主山と案山（集落の前面にある低い山）を結ぶ軸である。背山臨水の軸は気がもっとも流れるところであり、その軸に沿って穴と明堂が存在することになる。このような背山臨水の軸の線上に集落、住居が定着すると共に集落の向きが決められる。Settlement line は定着した集落における住居の向きが一番多い方位とする³⁾。

本研究では沖縄の石垣島、竹富島の集落を対象にして風水思想からみた集落の空間構成と季節風の関係について述べている。主に、風水思想の基本となる集落周辺の地形と四神相応の関係、背山臨水の軸と Settlement line について分析した。その結果をふまえて住居の坐向（住居の向き）と季節風の間関係を明らかにした。地形の分析の方法は各集落における地形の方位、集落と地形の位置関係、地形の高低などを中心に比較分析した。

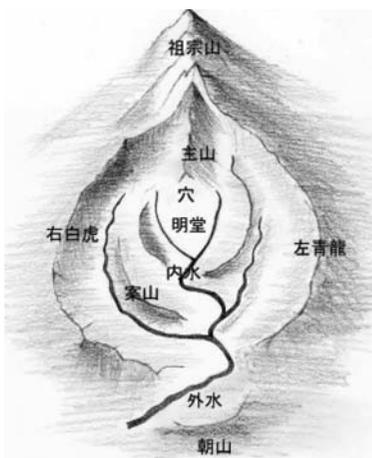


図4 理想的な風水図

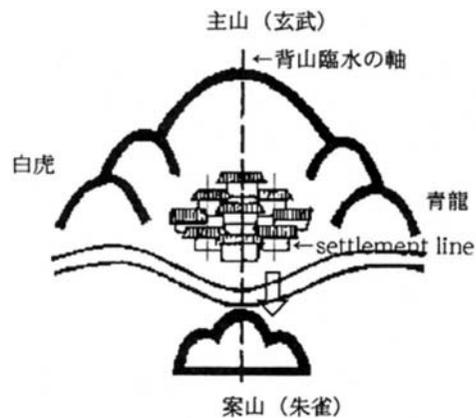


図5 四神相応と背山臨水

3-2 西表島祖納の集落

西表島の西部にある祖納集落は東南にある祖納岳（293.8m）を主山とし北西の海を前面とする背山臨水の形態になっている。祖納集落は渡名喜島と同様に四神相応の存在は希薄であるが、渡照間森（447.3m）を祖山⁴⁾とし、祖山と主山に繋がる背山臨水の形態になっている。また、主山となる玄武の集落が東の方にあるため四神相応の方位性は希薄である。図6のように集落のSettlement lineは背山臨水の軸と一致してない。すなわち、背山臨水の軸は東南から北西の方向になるが、Settlement lineは北東の山から南西の海へ、西の海から東の山の方向になる。

3-3 竹富島の集落

沖縄の農村集落の配置については古くからクサテノムイ（腰当の森）の考え方があり、中国の風水説に基づいているといわれている。配置の理想的な状態は南に向ってなだらかな斜面が続き、それは海に面する。そして集落の北側を小高い森が囲み、冬の寒い北風を防ぐ様になっている所を理想とした。このように竹富島は集落の北側を小高い森が囲み、背山臨水の形態になっている。しかし、小さい島であるため山が低く、ほとんど平地になっている。竹富島の場合は地形の高低の差はないが、微妙な地勢の差を利用し集落をつくったと思われる。竹富島の地形を四神相応になぞらえると図8のようになる。集落は四神思想になる地形をもって明堂に位置する。四神相応の距離をみると集落の中心から北にある一番高い山（海拔20.5m）が約0.5km離れた所に玄武、左青龍は東の丘（海拔15m）が約0.55km、右白虎は西の丘（海拔20m）が約0.55km

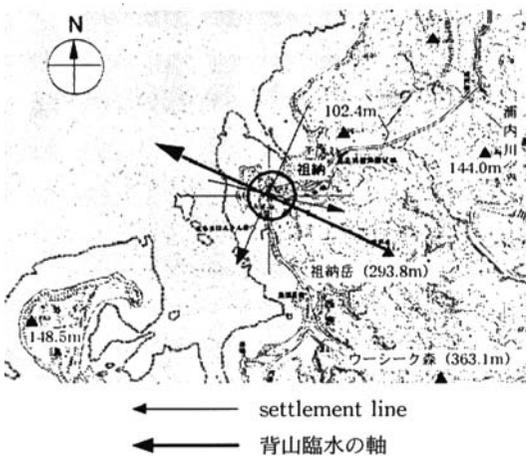


図6 西表島祖納集落の軸とsettlement line

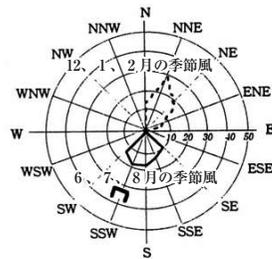


図7 西表島の坐向と風向

離れた所に位置している。また、案山は集落とほとんど同じ高さである海拔10mの所であるが、山林を山になぞらえて朱雀になる。

3-4 坐向と風

人と自然環境の中で、人間にとって最も大切なのは空気である。空気は動くと気流になり、風を意味する。風水は風と水の意味を持ち、「藏風得水」⁵⁾ という法がある。住居が建てられる条件として坐向をみる（住居の方位を決める）というのは、常に通風が良いかどうか、いかに風を避けるか等々の問題である。風水説では風と気は深い関係があり、良い影響を及ぼすものもあれば、悪い影響を与えるものもある。前者を「生氣」といい、後者を「殺氣」と呼んでいる。良い風というのは爽やかな風、清流を意味し、悪い風というのは突風、濁流を意味する。以上のような論理をふまえて良い風とは夏の涼しい風を受け入れることと仮定し、6、7、8月に多く現れた風の平均の方向を示す。また、悪い風とは冬の冷たい風のことと仮定し、12、1、2月に多く現れた風の平均の方向を示し、季節風の風向と坐向を分析した。西表島では、夏の季節風は東東南から南西までの範囲であり、冬の季節風は北北西から東東北の範囲になる（図7参照）。祖納集落の坐向は南南東であり、夏の季節風の方位角に入る。竹富島の季節風と坐向の関係は西表島の祖納集落と同じである。すなわち、夏の季節風の方位角に坐向が入る（図9参照）。この季節風に対して坐向は夏の季節風の方位角の範囲になっていることがわかる。これはやはり冬の冷たい風を防ぎ、夏の涼しい風を受け入れることであろう。

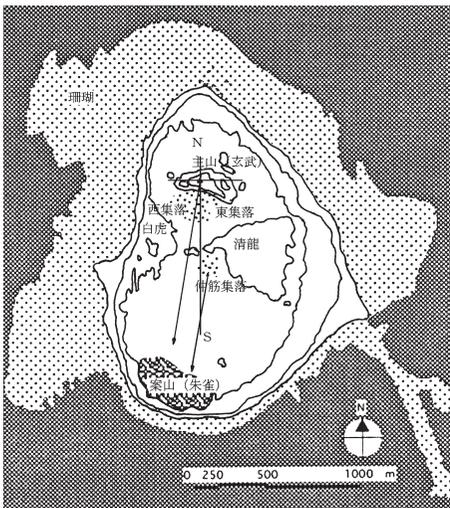


図8 竹富島集落の軸と settlement line

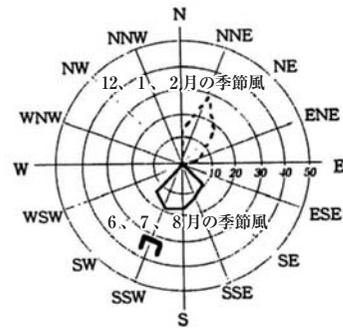


図9 竹富島の坐向と風向

4 伝統民家の外部空間構成

4-1 配置

沖縄の民家の敷地は一般的には道の南に面し、宅地の周囲に石垣を積み、その中に福木など樹木を植えている。その内部には、門・ヒンプン・大屋・前の屋・牛小屋・鳥小屋・納屋・井戸・フール・アタイ畑・花壇などがある。しかし、これら諸施設を完全に備えたものは、はなはだ少ないもので、現状には大屋・ヒンプン・花壇・などが残って使っているものが多い。牛小屋・鳥小屋・納屋は倉庫として使われている。建物の配置は門と主屋が軸線上にあり、主屋の前方、すなわち門を入れて左側にかけて畜舎・納屋があり、主屋の裏の左側の隅に石造りの「フール」と称する豚飼育所を兼ねた便所が配置されている。井戸は、畜舎と中庭の間に設けられ、離れ座敷の「あさぎ」は門の右側に配置し、前の家ともいう。あたい畑、すなわち菜園は主屋の背後にあり、主屋の右側には花壇などがある（図10参照）。

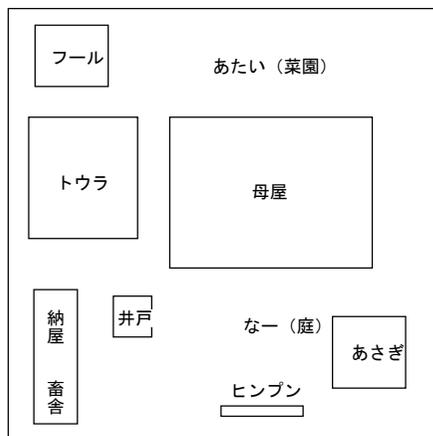


図10 沖縄伝統民家の配置

4-2 領域、境界、門

1 石垣

石垣は屋敷を強風から守るために発達したものであり、高さは約1.5m、幅0.7m前後であるが、都会では石垣の高さは2～3mもあり、厚さも0.9～1.2m程で、高さによって厚さも変わってゆく。石材はサンゴ、石灰岩の手頃な大きさの石を内外ともに小叩き仕上げにし、各々の石は互いに抱き合うように具合よく組積みしたもので、各石材の元の形、大きさをできるだけ保ちながら、1個の石に5～6個の石が接するように積み上げる方法を「亀甲乱積み」、「あ



写真6 島宮良殿内 (みやらどうんち) の石垣

いかた積み」という。他の積み方として正形の石材を積み上げる「布積み」がある。沖縄に見られる「布積み」の場合、本土の「布積み」と異なるのは、完全な正形の石材の一部を意図的に欠くことによって石相互が複雑にかみ合うように加工し、十字の部分から出ない様に積み上げ強度と耐久性を保つための工夫が徹底してなされている点である。「野面積み」は田舎でよく使われている最も原始的な積み方で、天然の転石や伐り出した比較的小さな石をそのまま積み上げる方法である。

2 門とヒンプン

門は道路などの関係で例外もあるが、南面しているのが普通である。門は按司の屋敷に限られていた。門は木造屋根付きの四脚門で、両開きの唐戸が付いている。一般農家では開いたままで、門扉はなかった。そして扉を設けないため通路が内部から見通せるので、門の内部に目隠し塀、即ち「ヒンプン」を設けている。

門を入ると正面に目隠し塀がある。これがいわゆる「ヒンプン」である。この「ヒンプン」は表から直接、建物の内部が見えないように造られたもので、屋敷内部の仕切である。中国には塀風門があり原形は中国から来たものであるが、「ヒンプン」のその形式は完全に沖縄化されて、色々なデザインが見られる。また「ヒンプン」を右に回れば一番座側へ向かい、普通、お客さん専用の出入り口である。左へ回れば台所側へ通ずるのが普通であって、家の家族専用の通路である。材料では石垣、瓦石垣、あるいは生垣（竹垣）、サング石、または板塀などがある。「ヒンプン」は色々な機能をもっている。基本的にはプライバシーの為の目隠しであるが、その他に防風効果、アプローチの空間演出、視覚的な象徴性、精神的な役割、サイン性を持つ。中国から由来し、また単なる目隠しの遮蔽垣ではなく、悪鬼直進を防ぐための魔除けの思想も



写真7 島宮良殿内（みやらどうんち）の門



写真8 島宮良殿内（みやらどうんち）のヒンプン

もっている。最近は耐風建築が増えたせいか、植え込みや庭飾り風のものなど、趣向を凝らしたものが多くなってきた。韓国のヒンブンはないと言われているが、調査により慶州でヒンブンをもっている家を発見した。

3 フクギ (福木)

福木はオトギソウ科の高木で、成木の高さは10~15m位になり、常緑樹特有の豊かな緑の葉を密につけてさわやかな気分を与える。福木は沖縄の人々の生活と最も深い繋りを持つ。沖縄の民家の屋敷囲いを見ると、樹木で囲うものと、石垣と樹木を併用するものがある。強風から家屋を守るために絶対必要であり、火事が起こった場合でも隣の家に移ることを防ぐ。また、太陽の光がきつい夏場には日陰になって子供の遊び場にもなる機能をもっている。



写真9 竹富島のヒンブン



写真10 福木 (竹富島)

4-3 外部空間要素

1 庭、あさぎ、井戸・菜園 (あたい)

本来、前庭の部分は、庭と呼び主屋の前の広場である。農家では作業場であり、今日でいう庭園ではない。普段は衣類や穀物類などの干し場になり、行事も行われる。主屋から前庭の眺めは、ヒンブンという一つの存在で、外と内との閉鎖された静けさを感じる空間がつけられる。庭園は士族屋敷の一番座の近くに築造された山水をいうが、農家では造られなかった。

あさぎは一番座の前方横に建築された離れ屋敷で、俗に前の家ともいう。通常は二室からできているが一室の場合もある。一般的には、息子が嫁をもらった時、あるいは老人の隠居部屋または来客の宿泊部屋などに用いられた。神を祀ってある場合には「神あさぎ」と呼ばれている。

井戸は「カー」と呼び、屋敷ごとにあるのが普通である。地形や地域によっては集落の数ヶ

所に共同井戸を利用する。井戸の囲いは石積みであり、流し場は石敷きである。農家あるいは田舎の屋敷には、主家の後方に「あたい」という菜園は自家用の野菜を自給している。

2 畜舎、フール（便所・豚舎）

台所近くの前方に畜舎を設ける。

建物の腰壁は石積みにし、壁はチンブ壁あるいは茅壁、屋根は茅葺きである。明治以後のものには瓦葺き板壁のものもある。

フールは中国から伝わった便所と豚舎を一緒にした施設である。中国では2階建が主で、人間の排泄は上階で行ない下階は豚を飼育する。沖縄では石造りで1.5坪～2坪を1区画にしたものが、二連または三連に造られている。この中を豚の飼育小屋として兼用しているのが、施設の中では最も特異的な存在であった。後方1/3は石造りアーチ型の屋根を掛ける。床と壁は石積みで、床は前方に勾配がつけられる。壁は60～70cmの石囲いで、前方には「タタキ」という石敷きがあって、その中に12～15cm×50cmほどの穴（東司）をあけ、その中に用便をするように造られている。そして、その前面には目隠しの石垣を80cm程の高さに積んである。フールの位置は屋敷の北西の隅と定められているが、その方位に祀る所がある場合のみ北東の隅に設けられる。その場合、炊事屋の位置や主屋の間取りなどはすべてが逆になる。フールの習慣はいつごろから沖縄にできたか知らないが、中国では漢時代からこの習慣があったと言われている。



写真11 母屋の前の庭（西表島）



写真12 フール（中村家）



写真13 トウシ（石垣島）

る。沖縄では大正時代、県令で禁止され、第二次世界大戦後には、米軍によって完全に禁止された。しかし、近年まで農村ではもとのままの設備が残っている。韓国では唯一済州島だけフルが存在していたがセマウル運動⁶⁾によってその姿は消えた。



写真14 高倉（中村家）

3 高倉

農家には特殊な施設として高倉がある

が、高倉のある農家は中流以上の農家である。高倉は高床式の倉庫であり、収納物は一般に穀物を主とし、そのほかあらゆるものに及んでいる。その構造は四本柱、六本柱、九本柱などがあり、昔は米作地帯には十六本柱もあって「公倉」または「群倉」と言われた。床は地上1.7m～2mほどの高床で厚板を用い、壁は上部が約45度傾斜している。高倉の出入り口は両開きの扉であったが、片引き戸もある。

5. 伝統民家の内部空間構成

5-1 平面の構成要素

沖縄地方においては無土間であることは共通しているが、奄美群島では前室と後室に分ける横分割間取りであるに対し、沖縄地方では、前室と後室に分けたうえ、前室を間仕切りして一番座と二番座に分けたものが多い。横分割を基調とし、縦分割を取っている。主屋とトウラという副屋との二棟構成が原型で、トウラは炊事場や物置に、主屋は座敷と寝室に用いられている。主屋の南側が座敷で、一番座、二番座、三番座の間があり、北側には一番裏座、二番裏座などの寝室が並んでいる。実際には二番座の前に「ルククイン」、三番座の前に「サンジャク」という間があって、日常のお客の応対、家内仕事などが営まれたといわれている。最近、生活様式の変化とともに、主に食料庫として用いた、「クール」が台所になり、「ルククイン」と二番座が一部屋となり、トウラのない家も増え、原型をとどめる家は少なくなっている。

5-2 間取りの機能

1 一番座敷

六畳の座敷で、北側に床の間が設けられ東南に面し、庭とも接して通風、採光、眺望ともに



写真15 沖縄の間取り（竹富島）

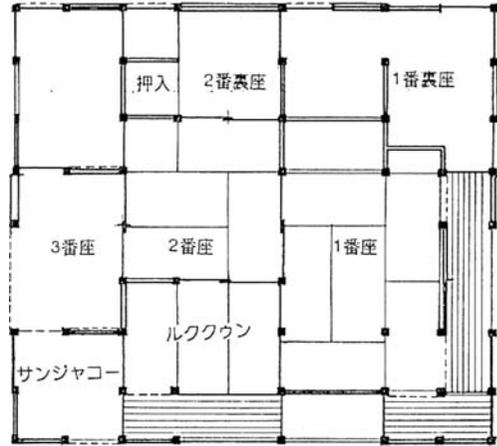


図11 竹富島上勢頭タモツ宅
平面図（明治25年建造）

0 1 2 5m

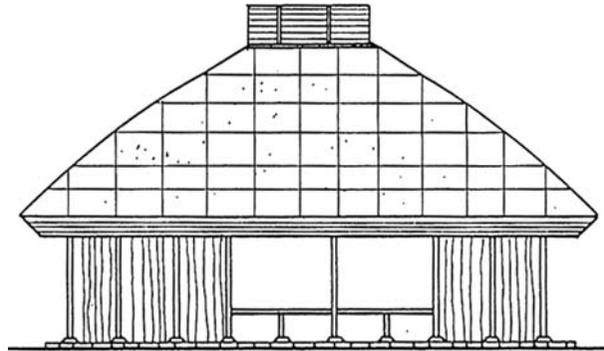


図12 竹富島上勢頭タモツ宅
立面図（明治25年建造）

最良の位置になる。そして、ヒンプンからお客の専用の通路であり、右に曲がってすぐ一番座に入るという客間として使われている。気温が上がる午後に日陰が出来るので涼しい。床の間には書画などの軸ものを掛け、また飾り物として沖縄の三味線が置いてある。

2 二番座敷

仏間で、中央の北側に南面して仏壇を設ける。御霊前の間とも呼び、正面奥の壁面に幅1間

(1.8m)の大仏壇を設けてある。その中に先祖の位牌を安置する。仏壇を立派に飾ることは祖先崇拝の表れである。一般的に仏壇は、二番表座に設けられるが小さな家では、一番座の床の間の左手に接して設けられたものもある。用途的には親類その他心安い人々（主に男子）を応接する客間である。親類や家族にも使われて家族が多い場合は、主人夫婦の寝室を兼ねることもある。

3 三番座敷

居間で、中流以上の住居では女性や若者の客間としても用いられ、茶の間および食事部屋に使われる。天井は太目の芋線、長押、縁側には地長押が設けられている。

4 裏座

各座敷の裏側には裏座という小さい部屋がある。これは納戸、寝室あるいは産室などの用度の部屋である。裏座の使われ方は、集落や島によって多少異なる。

一番裏座は長男夫婦または子供（男子）たちの居室、及び寝室にあてられ、中流以上の住宅では床が設けられることもある。二番裏座は主人夫婦の寝室または子供（女子）の居室、及び家族の寝室である。三番裏座は老人の部屋にあてられることが多い。ここにはいろりが設けら

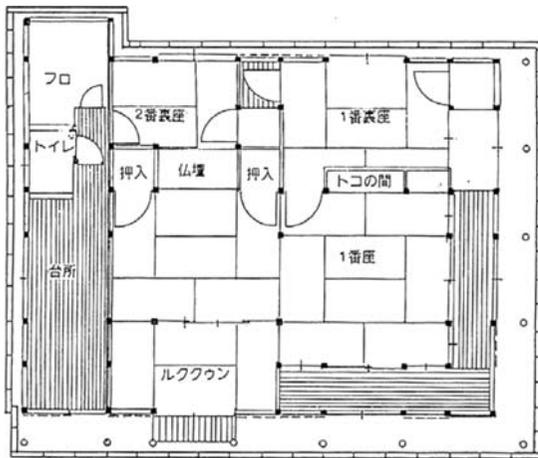


図13 竹富島東金城ケイチ宅
平面図（明治38年建造）

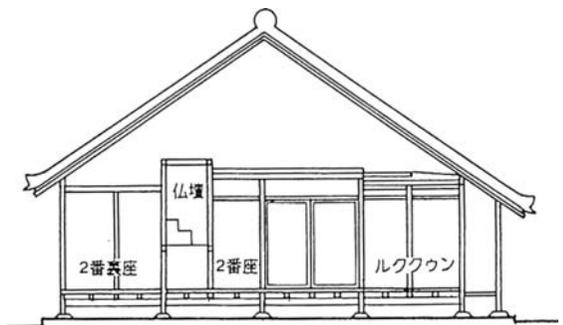


図14 竹富島東金城ケイチ宅
断面図（明治38年建造）

れる場合もあり産婦の寝室にもなる。

5 雨端（あまはじ）

雨端は一番座の側面、一番座から三番座前面に設けることによって室内と庭を結ぶ緩衝空間をつくる。それは構造的に横力抵抗の補強、耐久性からは母屋の柱脚や外壁、建具の保護など機能を持っている。また、低い軒は風を弱くし、強い日射を遮り、室内に涼しい日陰をつくり出す。



写真16 裏座（中村家）



写真17 雨端（あまはじ）

5-3 二棟造り（トウラ）

沖縄の場合、主屋と炊事屋が、別棟になっている二棟造りが特徴である。向かって右手（東側）に主屋、左手（西側）に炊事家を建てる。炊事家を別棟とすることについては別棟炊事家の地域は温暖な地方に多く、主屋内で炊事をするとうちに熱気がたちこめ、そのうえ煙がまくことを嫌うためともいわれている。また、建築技術の未発達や経済的な理由で、規模の大きい建築をなし得ず、小規模な建物を屋敷内に分棟させて建てることも考えられる。それにしても炊事場を尊重し、宗教的な習慣によって独立させたと思われる。炊事場にはカマド神という火の神があつて、家の養育の神、生命を与え存続させる神であると考え、家庭保育の神の場として、神聖な場所として別棟にしたと思われる。また、自然環境からみて沖縄は台風が多い地域のため、曲がり屋や大規模の民家は不利であるため、別棟が当然有利である。現地調査では八重山諸島の二棟造りの民家は、主屋の中で炊事が出来るように3番座の左側、あるいは裏座が台所に変わり、もとの炊事屋には、倉庫として利用されているのがほとんどだった。

6. 民家の立面

6-1 概要

石垣に囲まれた屋敷に、石垣の切れたところが入口で、その奥に「ヒンプン」という小さな塀がある。この「ヒンプン」によって公共と個人の空間がはっきりと区別されていて、外から見るとかなり閉鎖的である。道から石垣を隔てられてみえる赤い屋根の瓦と、防風林であり沖縄の唯一の緑である福木などが、このコントラストがいかに南国的で美しい。しかも、どっしりとした重みを感じさせる。しかし、沖縄は戦後、復興が初められ、RC造住宅がどんどん建てられて屋根は赤瓦の民家とは全く異質の物になったが、沖縄の都心地の住宅にとってはそんなに異質感とは感じられない。むしろ、RC造が沖縄の気候条件にあう材質になった。現在の沖縄の人々はRC造住宅に赤瓦と木造住宅の良さを取り入れ、沖縄の伝統美を生かして沖縄の郷土的景観を取り戻そうと努力している。

6-2 屋根

沖縄の伝統民家の草葺き屋根の材料は茅が主であるが、地方によっては茅と笹、茅と竹、サトウキビ殻なども使用されている。草屋根の上にある棟飾りは防風になり、台風に備えて実用を重視していて、沖縄の代表的な風物の一つとなっている。琉球民家の赤瓦屋根が普及したのは明治時代以後のことである。雌瓦の上に、円筒を縦に割った形の雄瓦を被せ、台風がきても瓦が飛ばされないよう雌瓦と雄瓦の継ぎ目を、粘り気の強い「漆喰」で丹念に固めてしまったものである。沖縄の漆喰は海岸から捨ててきたサンゴ石灰岩の塩分を除いて焼き、小さく切った藁と砂をまぜてつくる。最初のうち黄色味をおびている「漆喰」も、しばらくして乾燥す



写真18 二棟造り（トウラ、竹富島）



写真19 沖縄石垣の風景（竹富島）

ると真白になり、普通20～30年の耐久性があるといわれている。瓦は素焼きのまま本土と違って琉球瓦の独特の赤色になる。琉球瓦の赤と「漆喰」の白のコントラストが実に美しい。この屋根は、台風時の強風、風水の逆流、雨漏りを防ぐだけでなく、暑さにも強い。細かく編んだ竹の上の全面に隙間なく土を敷きつめ、その上に瓦をのせるので、断熱効果も持っている。

封建時代庶民は瓦を使うことが禁止され、すべてが草葺きの屋根であった。しかし、明治中期以後、封建的差別から抜けて、民衆の力の向上の結果としてこの赤瓦葺き屋根が定着したといわれている。屋根にのっている魔除けの獅子の表情や形はさまざまで素朴であり、ユーモラスに富み、楽しさと親しみを感じられる。

6-3 壁

過去琉球では土壁は使わない。瓦葺きでも草葺きでも板壁に改められているものが多いが、中柱構造の主屋や炊事家、あるいは物置小屋、家畜小屋、作小屋などには伝統的な茅壁、クバの葉、竹壁、網代壁などがある。壁のかわりに板戸である雨戸がある。ただし、炊事家の場合、防災のためカマドを築いている側壁はその面だけ石壁としていることが少なくない。雨戸の特徴はもちろん雨が主屋へ入り込むのを防ぐが、蒸し暑い夏場には全部開ければ風通しがよく主屋の全体が日陰の空間になる。雨戸を開ける程度によって、通風が変わってくる。また、風が吹いてくると、方位によって雨戸を開ければ、室内はいつも通風がよくなるはずである。沖縄民家の通風計画は単純であり、自由自在の通風が出来るようになっていると思う。



写真20 石垣と茅葺屋根（西表島）



写真21 瓦葺屋根（竹富島）

6-4 材料

建築材料として基礎及び塀の石垣に使う石材はサンゴ石とよばれ、一般に珊瑚礁によって出来た石灰石が主材料である。軟らかく加工しやすい反面、他の石に比べると耐久性に欠け、風雨による風化が早い。雨端柱の基礎にはとりわけ「ツブル石」と呼ばれている。水はけがよく、柱の腐食防止によいとされる。木材として、楨（チャーギ）は沖縄における重要な建築用材であり、耐久性、強度的にその優れた性質を持っている。沖縄の名物である福木は材質的にはねばりがあり、柱、梁材として使われるが、ひび割れが激しくねじれ易い性質がある。一般的には小屋組の束、梁など目立たない部分に使用される。

7 自然人文環境が伝統民家に与えた影響

7-1 自然環境の影響

1 気候の影響

沖縄民家の建築様式が本土の建築と著しく異なることの1つは気候の影響である。沖縄は亜熱帯性気候で台風が多いため、耐風的、耐暑的建築様式が必然的な要素となっている。このような気候の影響により民家は低い平家ばかりで、2階建ての家はほとんどなく、湿度は高いので床を高く上げている。やはり、2階建ては台風に不利であるといえよう。

家の形態は単純で正方形に近い。構造的には太い柱、低い棟、がっちりと安定した骨組みに構成されている。これらのすべてが台風からの被害を防ぐ為である。また、耐暑のため民家は開放的で、屋根は茅葺きや瓦葺きで厚くなっている。雨端は縁側から約1m外に柱を立て低い棟をさらに伸ばして支え、棟下を広くしているので沖縄の強い直射日光を防ぎ、雨が室内に入り込むことを防ぐことも出来る。

2 日射の影響

日射と日照を考慮して軒の長さを計算すると軒の突出部下端から開口部下端までの距離の0.016～0.079倍の範囲にあるのがわかる。これは軒の突出部下端から開口部下端までの距離を2mで計算すると、軒の長さは3.2cm～15.6cmが適当な計画である。しかし、これは日差しが与える軒の長さの計算であり、雨の浸水を考えると30cm～60cmぐらいが適当であろう。沖縄では夏至の正午の太陽高度は約85°～89°⁷⁾であり、太陽の日差しはほとんど直角に近く与えられている。その為か、軒の出は短いし、雨端の空間の幅は約60cmで、雨端というのは言葉どおり、あつい日差しより大雨が室内に入ることを防ぐ為につくられていたと考えられる。

7-2 人文・社会的環境の影響

琉球の信仰の基盤は、土着的な民族信仰、本土の神道、中国からの道教、仏教、儒教などの影響によって出来たことだといわれている。その中で水平神の「ニライ・カナイ」や垂直神の「オボッカグラ」信仰は、現在沖縄の精神と生活のリズムを支えている。母屋の中心に立派な仏壇を置くのも、座敷の序列を決めるのも、火の神もこの信仰と深い関わりがある。

風水判断が民家の造形空間設定時の吉凶判断だとすれば、屋敷地の地形、形状の判断こそ風水判断の重要項目の一つである。屋敷の地形は腰掛け状の地形である。つまり、後高前低の地形、または東高西低の地形をしている。屋敷から見て左高右低の地形を好む。

腰掛け状の地形とは村落のレベルの好風水として知られてきた「腰宛」状の地形と同じものである。同時に東高西低の屋敷地形を好むのも、風水上の観念として存在している。沖縄の人々の風水思想は大自然の原理にしたがって、それに逆らうことなく「吉福」得たいという気持ちが強かったのである。これは、先祖らが長い歳月で考えて気に入っている伝統的なものである。住居を構えるには、方位性が重要な役割を果たすが、これらは地形や自然、風向など自然的条件と信仰や習慣、風習といった社会的条件から定められる。

沖縄では東を尊ぶ。こういう習慣は、神のうち太陽神（女性神）を捧げることで、東の方向を神の出入りする方位として尊び、逆に西の方向を忌み嫌う習慣と思われる。その理由で一番座を東面させ、その前方（東側）に主庭園をつくり、西に向かって二番座、三番座と部屋の序列を明確にしている。建築の部位でもそのことはみられる。屋敷内を見ると、主屋を中心に西側に炊事屋、さらにその西に畜舎を配置している。さらに敷地の東南の位置には屋敷神を捧げる。こうした配慮も信仰を基盤とした習慣と思われる。道教が琉球への伝来した時期は不確定であるが、中国との関係から見てかなり古い時代だと思われる。道教思想が琉球の民家に影響を与えたものは家の入口にあるヒンプン、瓦葺き屋根の獅子、などは道教的魔除きの表しである。江戸初期から仏教が民家に影響を強く与えたため仏壇が生活の中に取り込まれ、現在に至る。

8 まとめ

8-1 配置計画

沖縄の集落の配置は、中国の風水説に基づいており古くからクサテノムイ（腰当の森）の考え方があった。理想的な配置は「背山得水」、「背山臨水」という、南に向かってなだらかな斜面が続き、前面には川、又は海が広がっている。そして集落の北側を小高い森が囲み、冬の寒い北風を防ぐようになっている。亜熱帯気候の沖縄では、夏場に季節風である南風を出来るだけ採り入れたいので南面に障害物がないように計画されている。冬場の北からの風はミーニン

と呼ばれ、集落、屋敷におけるこの方角には、防風の配慮がなされて来た。冬の防風、台風時の東風を和らげる為に北側と東側に福木を用い植林して、約50%の防風効果があるといわれている。敷地形状は平坦な所を選ぶのが一般であるが中には分散して建つ場合は台風時の対策上、敷地地盤面を約40cm位掘り下げて風の抵抗を少なくすることは浸水、通風よりは防風に重点を置いていると思われる。断面のように、塀の石垣の高さは地面から約1.6mで、敷地地盤面と地面との差は約0.4mであるということは、軒の高さは約2.0mあるから外から見ると屏の高さはちょうど軒の高さになる。これは台風が来た場合、軒下の壁の部分は強い風の影響は少なく、強い風は軒上の屋根を通過して行くのである。

8-2 平面計画

日本本土では四間型が多いし、半分高床、半分土間となっているのが大部分であるが、沖縄地方においては、全高床式で無土間であることと前室と後室に横分割基調とし、前室を間仕切りして一番座と二番座に分けられる。一番座をかならず東の方向に位置して西の方向に二番座、三番座に置くのは、自然環境の影響ではなく、沖縄の慣習である。

その地方の気候の影響を与えられて土間の存在のない南日本では、気候的な関係から、米、麦などの三毛作が可能なので専業農家が多く、屋外作業も自由なので小棟分立の傾向が見られる。これに対して北日本では米の単作地帯が多く、養蚕や畜産の副業農家が主で、積雪や降霜の関係からも屋内作業場としての広い土間が要求され、室面積もまた南日本より大型である。沖縄で代表的な例として知られているのは、多くは直屋で南面し、東を上座として接客用の一番座、西隣の部屋を二番座とし、大型の家は三番座まで設ける。南面して表座が設けられ、北側が「納戸」と同様な「裏座」である。

8-3 立面及び断面計画

沖縄伝統民家の立面で主要な要素の屋根はすべて最も安定する寄せ棟である。軒をできるだけ低くして、風からの圧力を減少するようになっている。沖縄民家の立面の特徴は雨端である。雨端（アマハジ）は沖縄の亜熱帯の気候風土に適した独特の空間である。本土の民家における軒の出を長くし独立柱で支えているもので、縁は一般には張らず土間であるが、規模の大きい民家については軒の出を更に長くし、縁側をつけることもある。こうした長い軒の出のある雨端は沖縄気候の特有の強い雨の室内への侵入を防ぐのみならず、周囲の地面に影を落とし、地面から反射してくる輻射を減らす効果大きい。軒の出のことは台風に対しては弱点となるが、これに対して太い軒柱で対応している。日常は接客の場としても使われる。

以上のように沖縄における集住空間構成について明らかにした。昨年度発表した「済州島における伝統的集住空間構成に関する研究」を踏まえて来年度には「沖縄と済州島の集住空間構成を比較」する予定である。

注

- 1) 朴賛弼「済州島における伝統的集住空間構成に関する研究」関西大学東西学術研究所紀要第43輯、2010年4月、本研究では風水理念に基づく建築的な空間構成を明らかにした。さらに、住居の空間構成の概念を図で説明し明確にした。
- 2) 朴賛弼「風水思想からみた韓国・台湾の集住空間構成に関する研究」民俗建築108号 p.5 1995年
- 3) 集落の背後の山を主山とし、その主山から集落の前方に水があるところの方向の軸とする。すなわち、主山と案山を結ぶ軸であり、ある程度の幅がある。気がもっとも流れる軸であり、穴と明堂が存在することによって集落、住居が位置する。
- 4) 祖山は主山の後ろにある山をいう。穴から一番遠く、高い山を祖山、祖山と主山の間の山を宗山というが、一般的に祖山、宗山を含めて祖山という。
- 5) 朴賛弼「済州島における城邑集落の構成について——風水思想からみた集住空間に関する研究その1——」日本建築学会計画論文集 No.497p.90、1997年7月、人と自然環境の中で、人間にとって最も大切なのは空気と水である。「蔵風得水」というのは良い風を蓄えて、良い水を得る方法であり、生活をより安全な状態に保つ意味である。
- 6) 1960年代前半から始まった韓国における経済復興運動。貧困から脱出しようとする政策。古いものを捨て、新しいものを取り入れるきっかけとする。この時期、農村は道路や電灯が拡充される。また草葺屋根からトタン屋根にかわる転換期でもある。
- 7) 90° - その地域の緯度 + 23.5°

参考文献

- 住宅建築別冊・40『南島・沖縄の建築文化 その1 地域的個性と現代の課題』建築資料研究社、1991
 住宅建築別冊・40『南島・沖縄の建築文化 その2 今日の住居30題と伝統民家論』建築資料研究社、1991
 野村孝文『南西諸島の民家』相模書房、1961
 田辺泰『琉球建築』座右宝刊行会、1972
 太田静六『九州のかたち民家』西日本新聞社、1977
 普請研究『沖縄・竹富島の家造り』普請帳研究会、1987
 日本の美術『第290号民家と町並み九州・沖縄』至文堂、1990